

『但州城崎紀行』（仮称）の紹介と翻刻

生 井 知 子
小坂部 悟 美

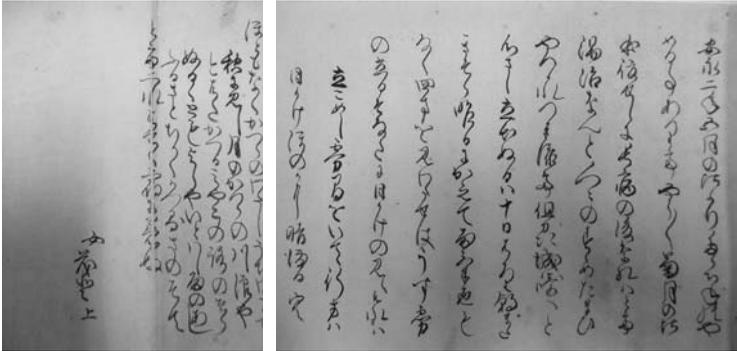
『但州城崎紀行』（仮称）の紹介

城崎在住の森貞淳一氏所蔵の古文書を拝見する機会を得た。比較的保存状態もよく、またこれまで公に翻刻されていないことから、森貞氏のご許可をいただき、今回翻刻及び報告する運びとなった。

まずここで本書の書誌を記す。今回底本とした本書には題目がつけられていない。本稿の題目とした『但州城崎紀行』とは本稿のために付したものであり、本来の書名ではない。本書は一卷の卷子本であり、縦一五・三×横四五・〇cmの紙を十枚連ねて巻き込んだものだ。保存状態としては、数カ所虫食いの

跡は認められるものの、先述の通りよいものとなっている。また、本書の伝来の経緯については、所蔵者の森貞氏も長く所持しておられるそうだが、詳細については不明なことが多く、正確なことは分かっていない。ただ本書巻末に「女 茂登 上」と署名があることから、この女性の紀行文であることに相違ないだろう。つまり極めて私的なものであり、公の記録でないことも確かだ。しかし、この女性の身元も明らかとなっておらず、また本書が茂登の自筆か否かも不明である。そもそもこの紀行文は、冒頭に「安永二年五月の頃より」とあるように、安永二年陰暦九月の頃に茂登の母の長く患っていた病が快癒し、その病み上がりに湯治を目的として城崎まで京都から母とともに旅

した記録である。しかし実際に道中で書かれたものなのか、あるいは旅を終えてからふり返って記したものは定かではない。ただ、本文の記し方に前半部分と後半部分にバランスの相違が見られ、後半部分では前半部分と比べ、行間や文字がつめられて記述されているという差異が見られる。不明な点の多い本書だが、本文には日毎にその日の天候や道中の景色などが詳細に記さ



れ、また茂登自身が詠んだと思われる和歌も添えられている。非常に整った筆跡でありながらも、過度に飾ることなく綴られた紀行は大変興味深い。当時の一女性としては非常に教養のあつた茂登が旅した道中を、本書を通して紹介させていただきたい。

【翻刻】

〔凡例〕

- ・森貞淳一氏所蔵『但州城崎紀行』(仮称)を翻刻する。
- ・原則、改行や文字遣いは、漢字は通行の字体とし、片仮名は適宜平仮名に改めた。底本における注記上の改行には／と表記した。
- ・合字は平仮名二文字に置き換えた。
- ・和歌は底本通り二字下げで表記した。
- ・底本の注記は()で記した。
- ・虫食いで不明の箇所には□と表記した。

安永二年五月の頃よりたらちねのや
める事ありてやうく菊月の頃
本復せしに長病の後なれはとて
湯治なんと人々のすゝめたまひ
やつかれつき添て但州城崎へと
心さし立出ぬ日は十日はかり朝また
きそら昨日にかえて雨気色も
なく四方を見わたせはうす霧
の立るそなたに日かけの見えけれは
立こめし霧間をいて、行方は
日かけほのかに晴渡る空
とよみて行ほとに町統もはなれ
野辺になれはきのふまで雨ふり
つゝ、き沼田のことく道もたとく
しなからあゆみつゝ、かつらのわたし打
わたり詠れは水かさまさりて
川瀬の音もつとくこゝかしこ立
ならふ木々の秋風身にしむはかり
おほして

『但州城崎紀行』（仮称）の紹介と翻刻

松風の吹そふ音もなかれ行
水にたゝえていと、はけしき
と打すんして行道は秋ふかき草
花多かる中にもわきて花薄
風に見たる、風情まねくことと
あやまたれ跡見かへれはなれし家
居は隔り心細くて
やすらはす行へき道も花薄
まねけはあとに心ひかる、
とて立やすみ見かへりつゝ、行
末はかた木原とやらんいふ里に着
てければ駕籠にのれよと従者の
すゝめぬるまゝに打のりて大
江山さして登りぬ
都をはけふ立出ぬ大江やま
遠きいくのやまたもこえな（見）ん
または老の坂ともいへるなど聞て
行人を見れば難所ゆへ若き人も
こしか、めみつわくむ姿を見て

(狂歌) 見れハミナヒトハ杖ツク山ノナヲ

老ノサカトヤイヒはしめけん

扱其次の里で暫やすらひひるの

したためなどしてもてゆくほとに

空かきくもり時雨を催し道行

人々あわてふためき雨具疾した、

めなどして打しほれつ、あゆみぬ

さしてたにうきは旅路を空寒く

時雨で袖のかわく間そなき

とよみて猶しも都こひしくおもふ折

から道はかもゆかすとしてつれしやつ

このせちに云ければいそくそのへの

松はらや行末の人のあやなき頃

やうく宿に着ぬ

十一日 けふはわきて晴天也時雨の空

も有気なく見えけれととくより加

籠をかりえて夜深く立てくらき

ほとに菅里はかり山路をこゆとおほ

えしかしの、めのそら次第くくに

晴らしくかちより行道は細き

あせ道也けふは猶しも古里の隔(ヘタ、)

りしとおもひて

行さきも見かへるかたもそことなく

心ほそ道わけそわつらふ

とて見やる日かけにしはし寒さ

も忘れ行さきはいと、人家も人

かけも都には変りて見えけれとかはら

ぬものは花のすかたあるくまかきに

菊の花の盛なりけるを見て案

内させて一もと求めせめて母のな

くさめにとて筒に入物して諸共

に詠めつ、家宿の菊やいかにと噂

なして

色も香もかはらぬ花に家宿の

さかりのきくを思ひこそやれ

あるしなき籬の菊はあた花と

人や(に)しられてうつろひやせん

とよめる心ほそ道板はしなとかけ

わたしあやうさもたひのならひよと
からふして行末は石多きみち也

難所なる中にも野辺にかゝれば秋

草のをのかさまく咲乱れたる花の中に
すみれなど見えて春の野にあそひ
しをおもひ出られ

秋にいま見し春の野の面影に

くさのすみれのさきて色こき

末は里を通り又は川よ野よと行く

て舟岡山または花おか山とやらんいひ

て春はつくしなどにて面白き所

と従者のをしへければ

秋さひて木草も今は枯ぬれば

花をか山の名にも似けなき

とてかく物毎不自由なる所也道

草も(なく)里にかゝれば所のわらはに爰は

何むらととひければ茨村細見むら

なと聞たひくは忘れてゆくもおかし

此所は川瀬多くてあやしき板はし

あるはねこかひとやらん名付てわら

あみ□を、きたる橋など見なれぬこと

なればわたりわつらふはかりなるかゝる

やうのはし五所もわたりてまたは

けはしき山またやまを打こえ果は

幾野と名にあふ所と急くほとに

日かけもまた高き頃宿に着ぬ末

□□あふ月の夜にちかければとく

よりいて、さやけかりけり

さやけしないくの、さとの草まくら

露おく袖も月のやとりは

昼のほとかゝる難所ゆへたらちねの

かいはうも心にまかせす宵のほとより

つかれしま、打ふせりて夢にはまた

古里にやかよひけんしたしき人々見えぬ

なつかしき古里人にあふと見し

ぬるまのうちの夢もほとなき

十二日 打つ、きはれわたる空なれば丹後の国へも

まかり所々見侍んと従者にもいひつけなと

にぬかつきて

幾とせを古にしまゝのあとなれば

心もすみて祈る広まく

天の岩戸なんともあるとかや人のおし
へけれと高山なればゆかすふもとのやとり
につきぬ

十三日 あすはとくより立はやとしめし置

しもあけすきて行かたは山路四里

はかりあると聞からいと、心やすからず

かゝるつらさも旅のならひと登りゆく

いかにも高山也また下り坂もけはしく

わきて岩のみ也土は見えわかぬほど

小石多くつまつきつ、やうくおりに

人心地すうき末はまたたのし頃もお

ほえ道くちを行は是もかるくしく

見わたす山は早木々の紅葉して気

色いとよし爰にこそいそかすはしはし

休らはんなどひとりつふやきつ、

いつとなく木きも見ましを此山に

して立出るさとはなれに幾野川とて大なる

川あり供たる者のからふしておひ渡しなどし

て行先は同じ旅路の松原や末はるくゝの

思なるに人にとへは一里余ありとかやそれ

より又川くおひわたしあるは舟渡しも

二所あり行くほとに八ツ時過る頃ほひ

俄に雨もよほし峰しきりて雨具して

急き来ぬれば外宮とてたうけの

宮の古きあとあるよし雨しのをつく

こと降けれと石壇を登りいともかし

こみ奉りて

今も猶旅をとめ来てかわらすも

うちなひきたつ柳葉のかけ

それより山のそは道かたへは川なるを廿

町はかり先に内宮といふありて宇治川

うち渡れば宮人もあり坂を登れば

実古き宮居としてしけりたる森に

小宮も(のなるべし)見え神さひたるさま頃しも暮

つかたなれはいと、心すみ渡り神前

ちかきみやこの所なりせは

うすくこく紅葉色ある山かけを

旅の行手に見捨るそうき

大江やまはそなたなりとをしゆるを見

れはいかさま立木もけんそなるあるは頼

光のこしかけ岩とて大なる岩あり二

瀬川とて両方より流れ落る水の

おとまで物すこく実鬼住山とや云

へけんとおもふはかりなる扱行くて

松原を過るにありしの音もたえく

に里ちかくや成ぬらん宮津の町に着

宿もとめまた日も高き頃なれば知

べの方へたつねまかり物語などして

帰りぬ其夜は十三夜なりければ都人や

めつらんやつかれも宿にありし時眺童

(出ノ字／あるへし／非か)

のおもひ。せしこと共ありしか珍らか成所に

やとりて月見る事よとおもふ折しも

しるへの方よりよきさかな取した、め給ひ

ければつれたる者共をあつめ酒たうへな
として一しほ興に入夜更るまで詠て

みやこにて思ひやりしも今こゝに

なかむる月の名にしあふそら

いつこにもめつるこよひとともに猶

かり寝もやらて月にあかさん

とて其夜も明わたり急き海辺へ出

わきて都にはなき舟にのり珍しく見や

る浪間に朝日かけうつらふけしきこ

なたには浦人のあみ引とやらん舟多く

よせて見ゆむかふには小山の見えていぬ

堂とて小き堂あり鶏つか此所には

こかねの鶏うつみ有るよし龍燈の松とて

年毎節分の夜いまにさゝくるとなん目立

て高き松こそそれかとよみつゝ、過れば天

のはし立名にあふ所と見渡せは浪の上に

立ならふ松のいく本となく枝をかはし水

の面にみとりのいろをうつし一かたな

らぬ詠め之も言のはにをよはさりけり

月の夜なんとわきて面白からんと
噂などして

見ぬたにも面影うかふ月やさぞ

消わたるらん天のはし立

早五臺山知恩寺とて文珠堂あり

舟さしよせて御堂へねかひ昇殿して

拝し奉るに梵天の作脇立はひしゆ

かつまの作(1)ときかせたふいとすせうに

ていと、かしこみ奉りぬ下向して此所

に暫くやすらひ風景をなかも見ても

見あかぬけしきながら舟人はや舟に

のれよとす、めければ残多かる心も

せひなく成相寺へとこきよせて

舟よりあかり山路十八町はかり登り

ぬ皆人汗を催しつ、やうく御堂へ

参り三十三所の内と聞からに猶しも

ありかたくかしこみ奉りて

三十あまりみつの内なる仏そと

ことにねかふも後の世のため

また普請半なれはかり堂にまし

ましていと、すせうにおほえことく

おかみてもとの道舟に打のりほと

なく岩たきといふ所へ着て昼の

した、めなとして夫より小坂をのほり

つ、爰そ海路を見るかきりと駕籠を

と、めて見るに遠方を行舟はまこ

とや一葉のあ□□聞しかと見や

りて

秋風にちりし木のはの漂ふかと

見えてた、よおおきの友ふね

十五日 夜のほと雨いと、降て道もかは

かねはくみといふ所より駕籠にのり行

間ほとなく川口や舟わたしこきよせく

城崎屋湯島に八ツ過といふ頃着ぬ

十六日晴天 十七日曇 十八日雨天

十九日雨天四ツ過より晴風はけし 廿日晴天 夜降

廿一日晴天九ツ時より少雨降 廿二日晴天扱此所は四

方に山くそひへ立西より東へ流る、

川と見えて其川は□北の方に温泉

わき出る一ノ湯二ノ湯とて一間半四方も

ありなん湯坪まはりは板てかこひかはら

やにたてる也それより二三間西にまた

同しくかさ湯とてあり並に上湯とて

少しせまくして皆同し亀屋也貴賤

男女老たるも若きも思ひくゝに行て入

湯す川の南北には人家凡三百軒ほと

立ならへ諸国の人を宿しあるはむき

わら細工なとしてあきなふ皆人しれる

所なり入口より二町斗奥に御

所の湯曼陀羅湯とてあり此湯

始は濁湯にて有しか道智聖人は曼

陀羅の香灰をうつみ給ひて忽清き

湯となり幾万人入湯すとも少しも濁

らさりける八所の湯是也と聞夫より二

町余も川上に末代山温泉寺とて薬師如

來の堂あり入湯の人々参詣す又三町

山上に大悲殿圓通閣とて観音堂あり

此本さち四所明神と現したひ此湯ををしへ

たひ千四十余年に及ひても退転せず

となん此明神所のうふ神とい(本ノマ、)やまひ奉

り九月九日祭とて賑はしきよし聞

つたふかゝる所へもふてすんはとおもひなから

も何(本ノマ、)くれとして一廻りに成ぬれと旅の

つかれに多く夢の心地して両三度ならて

もふてさりければかくてははいなしとて

廿三日より日参して一首つゝ、歌よみて

たてまつる

廿三日 晴天 山霞

松杉の木末をこめて峯ふもと

ひとつみとりに霞むのとけさ

廿四日 晴天 浦花

海士もさそ袖匂ふらんさくららはな

咲るこすえにかよふうら風

廿五日 朝より曇時雨 聞時雨

鳴捨し山ほとときすいつかたに

また初音とも待ちてきくらん

廿六日 曇夜大雨 五月雨

けふもまたはるゝともなく雲幾重

かさねてふれる五月雨のそら

廿七日 曇小雨 川月

浪の音川瀬にそひて秋ふかみ

ともにさへゆくよ半の月かけ

廿八日雨天九ツより晴 野鹿

妻恋る草のふしとにさをしかの

こえあはれなる野辺の夕ぐれ

廿九日朝曇晴天 落葉

一とをり時雨て後もまきのやに

風の木の葉の音ぞ烈しき

十月朔日晴天 里雪

きのふにも山の端に見し白雪も

里の軒はに今朝そふりしく

二日晴天 前風（雲）恋

（このの音にきくもまかはしうき人もかよひ□とへみねの松風）

（三日雨天／前雲恋）

跡なきもうしや時雨ゝむら雲の

さためもやらぬひとのこゝろに

四日小雨 述懐

玉峰の道ある時にあひ竹の

おきふしやすき代とあふかなん

五日曇九ツより晴 隣家

中垣をへたつともなき友とする

となりの笛のこえはかりして

六日雨天 海路

ひとつ江の床のうきねも明ははや

こきわかれなん沖の友ふね

七日雨天 寄松祝

冬枯し木々の中にも常とはの

松はちとせのいろもかはらし

とよみて手向奉りぬ

八日 はや三廻り入湯せしほとに上湯

せんとかねてむかひの人を言付置

けるかわきて夜のほとより雨いとう

降て小やみたになき空をなかめて

古里へむかふあしたの雨のあし

はれゆく空を見るよしも哉

と打すんして侍に夜降しきり

て宿なる人さも逗留せよとす、め

けれとむかひのひとの来りければせひ

なく立て三里はかり川舟にのり

豊岡へたそかれ頃つきぬ

九日 朝とくよりもたちて行町は

なれに川あり舟わたしてむかふへあか

りつ、みつたひ三里はかり川辺をと

をりければ風はけしく手あしも

ひえわたるほどに道も急きつ、向

の山際に見ゆるは出石の城なりと見つ、

行かたへは妙見山うしろに見ゆるはふる

いかたけ雪いとしろうふれりまた

冬あさき頃なれば

幾重こし山のかひとや朝またき

見そめてけれなけふのしら雪

と詠めつ、出石の町も包あぢ山とやら

ん打こえ久畑むらといふにやとりぬ

十日 朝戸出に詠れば軒もまかきも

降つもりければ

みやこにてかくしもつもる雪ならば

とひこんひと、ともに見ましを

見捨て立出る道も猶ふかく山のけしき

ふもとの松川竹はみどりの色をそへ

ちりのこる楓はくれなるの色をまし

え浪の音は聞へぬれと白のたつは

おなし色をなし家ゐもこ、かしこ

に見え残に桑の木多作れる所

にて枝もたは、につもるさまゑかく

とも及ふましとおもふはかりなるさて

のほり尾といふ山五十六あるとなん

とうけとおほしき所は三四寸(斗)もつもり

けるをのほるとて

古里へチカツク道のウレシサニ

寒サワステテ雪をノホリ尾

と狂歌なと口すさみておくりければ

やかてもと来し道へさしか、り向に

みゆるは福智山の城なりといふほどなく
通り見れば外面は堀をかまえたへは
松原うち廻ていくの川へ至りぬ下り
し頃にかわりていとほそく幅は一尺
はかり長サ百間斗ありて川のなか
れなりにかけわたし猶しもあやう
く見えいかにしてわたらんとおもふ斗
なるになれしわさとてやすくと
駕籠打わたし暮になんくとする頃
着ぬ

十一日 またも星をいた、きて出るに
霜いとしろく雪のことをきて夜
あらしもいとさむくたえかたくや有
けん町はなれはやしにか、れは道中に
おちはをあつめたき火にあたるさま
見なれぬことなれはおそれぬれと
これも旅のならひよと共にあたりて
寒さをしのく有さま興さめたる事
ともとつふやきつ、行うち夜もやうく

明はなれやかて三原村といふ先にゑほ
し山といふはあれかとよ又ちうたい村⁽²⁾
誓願寺とてもとは寺ありしか焼
失して其跡とて少き廬あり小式部
のつかありけると聞かこを待たせて
もふてぬ

ひなの土に有しその身はうつむとも

埋れぬ名をきこえあけ、む

とふもうき袖に露そふ大江山

こえてひな路の苔の下そと

とよみて手向ぬもはや日もか(た)ふきぬ
とて急きてもみしかき冬の頃なれ
は暮過てやうくそのへに着ぬ

十二日 京へ入なんはあしたとおもへは
うれしさに夜も(い)ねやらす夜ふかく
立て八木のまち幾村さとも越来て
見れば亀山の城は弓手に目手にと⁽³⁾
いそく折から雨催しぬれつ、急く
ほともなくかつらのわたしうちわたりて

秋に見し月のかつらの川浪や

今はたかへるみやこの路のそら

ぬる、ともよしやいとほし雨のあし

ふるさとちかくかへるまのそて

とてくれはて、宿に着ぬ

女 茂登 上

〔注〕

(1) 「毘首羯磨」とは仏教語であり、『総合仏教大辞典』には「天

地創造の力を神格化した神で、リグ・ヴェーダに起源をもつ。

帝釈の命をうけて建築工芸のことを司るとされる神。」とさ

れているが、これを転じて建築や工芸の達者な者を言ったの

であろう。

(2) 正式表記は「中台村」、現在の船井郡瑞穂町字中台か。『日本

歴史地名体系26巻』には、「双円形の鼓山の南にあり、京街道に沿う。村域は中台野あるいは皿引野とよばれる高原状台地である。」とある。

(3) 「亀山の城」とは、京都府亀岡市の亀山城か。『日本歴史地名体系26巻』に、所在地は「大堰川右岸の河岸段丘上」とある。

〔参考文献〕

・総合仏教大辞典編集委員会『総合仏教大辞典』二〇〇五年二月
(法蔵館)

・下中邦彦『日本歴史地名体系26巻 京都府の地名』一九八二年
三月(平凡社)

・下中邦彦『日本歴史地名体系27巻 京都市の地名』一九七九年
九月(平凡社)

・下中邦彦『日本歴史地名体系29巻1 兵庫県の名』一九九九
年一〇月(平凡社)